

1 雨の中の出会

「あなたにとって、愛って何なの？」

既にもう、離婚の話も何度かして、口論さえなくなっていた頃に、別れた妻は、これだけは言いたかったというふう^ひに唐突に切り出した。相良郁哉^{あいらいくや}は、段ボールに本を詰めていた手を止めて、その泣いているような引き^ひ攣^つった笑顔を見上げた。

「かたちだけの結婚なら、続ける意味なんてない。」

「不幸な組み合わせだったんだよ。」

彼はただ、そう言っただけだったが、妻が最後に、心底^{こぞ}蔑^{さげす}むような目をしたのは、その時だった。

「本当にそう思ってるの？」

「そう言いたかったんじゃない？」

「あなたにとって、愛って何なの？」

「……。」

「最後だから教えて。ね？ 愛って何？ あなたにとって、本当に大切なもののなの？」

「いい加減にしてくれないか。」

「教えて。愛って何？」

喰い下がられて、彼はとうとう、観念したように言った。

「何だろうね。……少なくとも、水や空気みたいに、無いと死ぬってほどのものでもないよ。」

事務所のソファで、テレビを見ながら、相良は、パニラ味のホームランバーを食べていた。

——二年以上も経って、なんで今頃、あんな嫌な会話を思い出すんだろう？……

雨は一向に降り止む気配がなかった。

夕方、Macのモニターを睨みながら作業をしていると、突然、小鳥が窓ガラスにぶつかったような鈍い音がして顔を上げた。血ではない、透明の大きな滴が垂れている。続け様に更に数滴が窓を打ち、今度はもっと長いあとを残した。

空はいつの間にか、真っ暗になっている。次の瞬間、堪えきれなくなったように、その重苦しい雲の底が抜けて、どっと水が溢れ出したのを、彼は窓辺に立って呆然と眺めていた。

やがて出し抜けに光が炸裂して、巨木が薙ぎ倒されるような轟音が鳴り響いた。

自宅は神宮前で、普段は徒歩で仕事場に通っているが、傘を差しても、外に出た瞬間にびしょ濡れになりそうだった。15メートルほど歩けばタクシーも拾えるはずだが、乗り降りの億劫を思うと、誰が待っているわけでもない家に、そこまでして帰る気になれなかった。

根津美術館の前の道を、ワイパーを振り乱して車が走り抜けて行く。歩道に向けてタイヤが羽

ばたかせる轍わだちの水の翼は、一台ごとに大きくなっていった。

「どうしたもんか。……」

空を見上げてそう眩くと、その言葉のせいで、また別のことに思い当たって、思わず首を傾ひげた。——それから、四時間ほどが経っていた。

相良郁哉あいらい いくやは、プロダクト・デザイナーである。雑誌などのプロフィール欄には、インダストリアル・デザイナーと書かれることもあるし、単にデザイナーと紹介されることもある。人から、具体的にはどんな仕事ですかと尋ねられる時には、椅子とか、棚とか、電卓とか、あるいは、トースターやマグカップ、ホットキスなど、身のまわりの生活用品一般のデザインをしていますと、簡単に答えている。

東京の美大の工業デザイン学科を卒業した後、アルバイトで貯めた十分な資金で、一年間、ヨーロッパの各地を転々とした。ぶらぶらしていたと、彼はよく笑って人に話したが、実際は、金もなく将来も不安で、毎日悶々としながら過ごしていた。今の事務所が「Aylar Design Space」となっているのは、当時、四ヶ月ほどルームシェアをしていたイギリス人の売れないミュージシャンが、彼を Albert Aylar アルバート・アイラー に引っかけ、アイラー、アイラーと呼んでいた思い出の名残である。

一年間の海外生活で、そこそこ英語が喋れるようになった。それが重宝がられたのもあって、帰国後はスタッフを十人も抱え、世界中のメーカーと二百件以上の契約を交わし、そのうち常時

四、五十件ほどが同時進行中であるという、有名デザイン事務所に拾ってもらい、八年後に独立する頃には、所謂^{いわゆる}番頭^{ばんとう}になっていた。

それから、五年目を迎えて、先月、三十七歳になったところである。勤務していた頃に仕事で知り合った女性と結婚して、二年とちよつとで離婚したが、その間に事務所に一人雇ったアシスタントはまだ続いている。それが、さつき雨が降る前に帰宅した緒方君^{おがた}である。

テレビを消すと、ホームランバーの最後の一欠片^{ひとかけら}を、ゆつくりと噛み締めた。わかりやすい、単純な味は勿論のこと、すつきりとした直方体のかたちと言い、少し物足りないくらいサイズの言い、これほどクールなデザインのアイスクリームはなかった。時々これを舐めて丸くしてから食べる人がいるが、とんでもない間違いで、白い湯気みたいなのが立ち昇るうちに、あのかたちを、あの大きさのまま前歯で折って、木の棒から外して食べるのが絶対にくまかった。しかもそれが、袋に入っているのではなく、銀紙で包装されているという奥ゆかしさである。

木の棒をもう一紙めして、その銀紙で、刀の鞘^{さや}のように包んでゴミ箱に捨てた。

クーラーを切ると、微騒音が止んで、室内はいよいよしんと静まり返った。仕事場は50平米ほどで、天井高は3メートル弱。この広い世界の中で、彼が、誰にも邪魔されることなく、仕事に専念するために確保しているのは、その150立米ほどの静寂だった。それが、今は量的に、少し多すぎる気がした。

壁のスイッチで、一列分の蛍光灯の明かりを消した。本棚や模型など、彼を見返してくる物の

目が閉ざされて、その分、まわりの静寂は眩しく、耳障りだった。うるさい静けさというのがあ
るな、と、彼はぼんやりと考えた。

もう一列も消すと、部屋の明かりは、デスク・ランプだけになった。ミケーレ・デ・ルッキが
デザインしたトロメオというランプで、発売後、四半世紀経った今でも売れ続けている、既に半
ば歴史的な名品だった。サイズは幾つかあるが、彼は、土台が場所を取るデスクに置くタイプで
はなく、床に立てる1メートル半ほどの高さのものを使用している。

アームには、細いワイヤーで引っぱる三箇所関節があり、アルミ製のシルヴァーのシェード
は、お椀を少し大きくしたくらいの円錐台である。

寡黙で、且つ曇りのない輪郭線。少々なことでは面白がりそうもない、世慣れたふうの佇まい。
各部の必然は、創意によって橋渡しされ、創意はまた必然に仲介されて結び合い、途切れなく連
続している。美観と機能とは、電源を入れる度に新鮮に握手し合い、人間の孤独な集中力を洒脱
に励まし続ける。

濡れたガラス窓の中に浮かび上がったその姿は、雨空を背景にして、ちよつと、バロック絵画
に描かれる、雲間から光が降り注ぐ神聖な光景のようにも見えた。モダニズムの時代に、誰かこ
んなふうな、デスク・ランプの姿をした神の絵を描いた画家はいなかっただろうか？ あるいは
むしろ、ポスターか？

相良は今、高輝度LEDのデスク・ランプのデザインに取り組んでいた。

光自体のデザインから、ランプのデザインを考えたかったが、シェードから放たれる光につい

ては、デスクからの反射に呑み込まれて、まったくかたちを成さなかった。ただデスク上に、まろやかに光が広がるだけで、隣接する闇との境界も曖昧である。デスク・ランプは結局、人間の仕事を小さな間接光で包み込むための道具だが、そのかたちや大きさは、環境次第だった。

相良は、徐に天井を見上げて、一箇所だけ、円形に特に強く光が当たっている部分を見つけた。元を辿ると、シェードの上部に、放熱のために円く穴が開いている。少し考えてから、シェードを180度回転させて、ライトを真上に向けた。予想以上に、天井で反射する間接光は強いが、デスクで仕事が出来るほどではなかった。キーボードには、先ほど天井にあったシェードの上の穴の光が、半分だけかかっている。

天井向きに強いライトを一つ作り、下に反射するその間接光で、デスクを丸ごと柔らかに包む。更にもう一つ、下向きのライトを作って作業用のスポットライトにする。部屋の電気は点けなくてもいい。——考えごとをする時のクセで、彼は、人差指の付け根を噛みながら、うまくいくかな、というふうに首を捻った。手応えはあったが、かたちがまったく見えてこなかった。二つのシェードを、背中合わせにくつつけるか？ そうすると、アームとの繋ぎ方はどうなるんだらう？

一旦、トロメオのシェードを元に戻すと、彼はアイディアを簡条書きにして、ペンを置いた。そして、溜息を吐きながら椅子に腰を下ろした。

成果の乏しい一日だった。それは、光という、実体があるようでないようなものを相手にしているからだろうか？

窓を流れ落ちる雨は、先ほどよりもむしろ量を増していた。

椅子の背を少し倒して、彼は放心したように、デスクの下の段ボール箱を見つめた。「こわれもの注意！」の赤いシールは、そう大声を発しようとしたまま、暗がりの中で固まってしまったかのようなのである。

やがて、両膝を叩いて、その宅配便の箱のガムテープを剥いだ。ふたを開けて丸められた新聞紙を取り除くと、ビニル袋にも入れられずに詰め込まれた、蚕の繭のような緩衝材が、ポロポロと零れ落ちた。手で漁ると、中から陶器のようなものが覗いた。更に掻き分けて、ふたを開けたところで、彼は手を止め、眉間に皺を寄せた。

今朝、配達員から直接この荷物を受け取った時、送り主の名前を見て悪い予感がしていたが、事実はそれ以上だった。

背もたれに体を預けて、両手を頭の後ろで組んだ。

——こんなもの、送りつけてきて。……クソッ。

携帯を手に立ち上がると、暗がりの方へと移動しながら、送り主の男に電話を掛けた。意外にもすぐに出た。

「もしもし、この前……」

「オキヤクサマノ、オカケニナッタバンゴウハ、ゲンザイ、……………」

舌打ちをして一旦切り、もう一度発信したが、同じだった。

携帯を放り出すと、額に手を宛てがって、痛みを堪えるように固く目を閉じた。どうしたらいい？……警察に届ける？　そういう話じゃないのか？……

息を吐いて、改めて段ボール箱に目を遣った時、突然、通りで爆発でも起きたような大きな音がした。

——何だ、今の？……

雷ではなかった。窓を開けて首を出したが、何も見えない。そのほんの僅かの間に、事務所の床は吹き込んだ雨で水浸しになった。窓を閉めて、しばらくその場に立ち尽くしていたが、急に思い立ったように携帯を手にとると、傘を持って部屋を駆け出した。

エレヴェーターで地上に降り、エントランスを出ると、軒下で火花のようにバチバチと音を立てていた水飛沫が、足元から彼を濡らしていた。

傘を差して飛び出したが、ナイロン製の生地に打ちつける雨粒はほとんど玉のようで、音だけでなく、持ち手の振動からも、その大きさが伝わってきた。

ジーンパンは見る見るうちに濃紺に染まって、両太腿に重たくまとわりついている。

歩道の縁には大きな泥水の流れが出来ていて、それを照らす街灯の下には、スローモーションのように雨滴がちらつく静かな光があった。

何かが起こっているという胸騒ぎだけがあって、どこを見渡しても、街はただ、水浸しのまま押し黙っている。

根津美術館の前を走る道に出て、骨董通りの方に目を遣った。向こうの信号の先で、二台の車

が、細い片側一車線の道を互い違いに塞いで停車している。一台は、珍しい国産のスポーツカーで、こちらを向いた紫色の（大蛇^{オロチ}）。もう一台は、逆を向いた巨大な（ハマー）で、テールランプはついたままだった。

状況が飲み込めなかった。黒いシャツを着た男が、傘も差さずに、ハマーの助手席の窓を叩いている。どうもハマーは電柱に衝突しているらしく、よく見ると、折れかかったその上部が、電線を引っ張って、今にも倒れてきそうになっていた。

男は、ドアを開けようと取っ手をガチャガチャ言わせているが、中から人が出てくる気配はない。

運転手が、怪我をしているのか？ しかし、救助しようとする割には、動作の一々が乱暴なので、どちらかというと、タチの悪いチンピラが、事故の相手を恫喝^{どくわ}しているような感じだった。

あの黒シャツの男が、大蛇^{オロチ}の運転手なのだろうか？

相良は、携帯を取り出して、警察に電話するためにボタンを押しかけた。

黒シャツの男は、何かわけのわからないことを喚き散らしながら、突然、拳で目一杯、ガラス窓を殴った。そして、完全に取り乱して、耳が隠れるくらいの長い髪を掻き上げながら、ハマーの前に回ってしゃがみ込み、下に向かって叫び始めた。

——人がいるのか？……

ゾッとして駆け寄ると、それに気づいた男は、助けを求めるわけでもなく、半ば^{なか}放心した、警戒するような表情で、こちらを見ていた。

「どうしました？」

ハマーの運転席をちらと見たが、暗くて中はわからない。

男の横に来て、相良は、思わず声を上げた。

顔を少し横に向けて、女が一人俯^{うつぶ}せで倒れていた。白い薄手のワンピースは、血と泥で汚れていて、その上から、容赦なく雨が打ちつけている。

「救急車は？ 呼びました？」

「……いや、まだ……」

男の返事に、相良は驚いた。そして、改めて下を覗き込んで、顔色を失った。車体の傾きは、歩道に乗り上げたせいだけではなく、その下に彼女の足があるからだだった。厳^いめしいタイヤに押し潰されて、ピンクのハイヒールを履いた爪先が、上を向いている。横からも確認したが、ちぎれているのか、皮一枚で何とか繋がっているのか。……雨に薄められているとは言え、目を凝らすと、濡れたアスファルトには、身の毛もよだつような血溜まりが出来ていた。

「今、救急車呼びますから！ 聞こえますか！ がんばって！」

大声で呼びかけたが、女は反応しなかった。引っぱり出せるだろうかとかタイヤの下を確認したが、無理をすると、足が完全に切れてしまいそうだった。

「とにかく、車をどけましょう。」

119番を押しながら、相良が声を掛けると、男は、

「運転手が気絶してんだよ。」と言った。

助手席の窓に顔を近づけて目を凝らし、首を伸ばしてフロントガラスからも運転席を見た。窓を叩くと反応はあるが、ぐったりしていて、こちらを向こうとしない。

「あ、もしもし、……交通事故です。南青山四丁目の交差点近くで。怪我人二人。一人は重体、……え？……そうです！ 女性が車の下敷きになってます！……」

携帯を肩に挟んだままドアを引っぱったが開かない。車体の揺れが、彼女の体に響くようで恐かった。電話を切ると、立ったままこちらを見ている男に、

「警察は呼びました？……警察！ 呼びました？」と声を掛けた。

気が動転しているのか、まったく反応がない。

「あの車、あなたのですか？」

「オマエに関係あんのか？」

「え？」

男は、相良を無視して、目に入る雨を拭いながらハマーの前に回り込んだ。

「いや、……車内にハンマーがあるでしょう？ 水没した時にフロントガラスを割るための。あれで割りましょう。」

年齢は、四十代半ばくらいだろうか。大きなクロスのネックレスをして、胸元をはだけている。雨の中なのに、頭が痺れるような、むせ返るような香水の臭いがした。指図されるのが気に食わないのか、男は頬を痙攣させて相良を睨みつけ、不承不承、大蛇に歩いて行った。その間に、相良は、運転席の方に回り込んだが、ガードレールが邪魔をして、ドアは開きそうになかった。

さっきの電話では、息をしていますか、とオペレーターに尋ねられて、咄嗟に、はい、と応じたものの、確認はしていなかった。まだ生きているんだろうかと、彼はこの時、初めてそのことを疑った。傘を畳んで投げ出すと、改めて彼女の前にしゃがみ込んだ。このままの状態では、いずれにせよ、蘇生措置は出来ない。まず仰向けにして、足の出血を止めて、……

手首を握り締めると、氷のように冷たかったが、指先に辛うじて脈が触れた。その微かな拍動のために、彼女はまた命を保っていて、しかもその破れた体の輪郭からは、止め処もなく血液が溢れ出していた。

立ち上がって振り返ると、黒シャツの男が、無言で赤い柄のハンマーを突きつけた。その勢いで、零さないようにと氣をつけていたコップを、無造作に倒されてしまったように、胸の内に一氣に不快が広がった。

「警察に電話してください。」

ハンマーを受け取ると、助手席の窓ガラスを叩き割って解錠した。車内は、まったくの別世界のように豪雨から隔離されている。シートに粉々に散った破片を見て、きれいに碎けるものだなと、ハンマーにとともに、ガラスにともつかず感心したことを、彼は後々まで記憶していた。

運転手は、その衝撃にも目を開かなかった。引き摺り出すためには、車に乗り込まなければならなかったが、もう一人分、70キロほどの重さが彼女の足にかかってしまうことには、生々しい不安があった。

雨で、彼自身の体も冷えてきていた。背後に警察を呼ぶ気配はない。振り返って、突っ立って

いる黒シャツの男を見ると、いよいよ、怒りを抑えられなくなった。

「警察は？」

男は、相良の顔の上で視線をうろつかせた。

「電話！」

「わかるだろ？ オレはダメなんだよ。」

「は？」

「だから、……知ってるだろ、オレのこと。」

「……。」

「オレはマズいし。女も困るだろ。」

相良は、頭を混乱させながら、彼女の様子を気にして振り返った。

「悪いけど、オレはここにいられない人間だから。——救急車、来るだろ？ 後で絶対連絡するから。頼まれてくれ。——な？」

そう言って、男は何かを渡そうとした。

「何言ってるんだよ、あんた、さっきから？」

顔を拭いながら、相良はとうとう声を荒らげた。黒シャツの男は、構わず、相良の濡れたポケットの中にそれをねじ込んだが、はみ出ているのは、二つ折りにした十枚ほどの一万円札だった。

「……何だよ、これ？」

「オマエさ、人がこんだけ頭下げて、誠意尽くしてんだろ。な？ 読めよ、マジで。フツー、わ

かるだろ、ガキじゃあるまいし。」

びしょ濡れで、髪はオールバックになっていたが、そう言えばどこかで見たような顔だった。

——誰だろう？……

半ば呆気^{あつけ}に取られて、ポケットから札を取り出すと、二、三枚がその場に落ちた。

遠くから救急車のサイレンが聞こえてくる。黒シャツの男は、倒れている女を顎で指すと、「頼んだから。」と言って、大蛇^{オロチ}に向かって歩き出した。

「オイッ、ちよつ……」

呼びかけを無視して、男は車に乗り込んでエンジンを掛けた。大蛇^{オロチ}の目に、光が灯った。相良は、引き留めなかったが、女の方が心配になって、素早くナンバーだけを確認した。

「……クソッ、……」

とにかく今は、彼女だった。改めて駆け寄って首許に触れた。脈がわからない。

「すぐに助けが来るから！ がんばって！」

その時、突然車体が微動した。立ち上がると、意識の混濁から這い出そうとしている運転手が、シートベルトをしたまま、左側のドアを開けようと、体を揺らしているのが見えた。

「そっちじゃない！ こっちこっち！ ベルトを外して！」

助手席に回ってそう呼びかけると、運転手は、顔を顰^{しか}めながら辛うじてベルトを外し、ガラスの散らばった助手席に倒れ込んだ。引っぱり出そうとしていたところで、反対車線を通りかかったタクシーが、車を停めて窓を開けた。

「事故ですか？」

「事故です！ ちょっと、手伝ってもらえます？ 女の人が、……」

下を指差すと、小太りの運転手は、目を円くして少し先に車を駐め、濡れながら走って戻ってきた。相良はその間に、ハマーの運転手を外に出して、ビルの軒下に休ませた。

「下敷きになってるんで、車、バックさせられます？」

タクシーの運転手は、頷いて車に飛び乗ろうとしたが、やはり同じように、自分の体重が女の体に加わることを気にした。相良は、仕方ないというふうに頷いてみせた。

救急車のサイレンは近かった。

「ゆっくり下がってください、ゆっくり。」

車は幸い、故障していなかった。さすがに心得ていて、1メートルほど静かに下がったあと、思いきって後方に移動して、救急車の駐まるスペースを作った。

彼女の足が、ハマーの重みから解放された瞬間、相良は、自分の胸からも、一緒に何かを取り払われたように感じたが、そこで明らかになった怪我の惨状には絶望的な気分になった。

「もう、重くないから。……がんばって。」

水を吸い込んでしまわないように、膝について仰向けにしかかったが、すんでのところで、頭や首の損傷を危惧して思い留まった。

タクシーの運転手が、トランクからタオルを持ってきた。足の止血をしようとしたが、鋭く骨が突き出して、引きちぎられたようになっていいる傷口を前に、為す術がなかった。

警察に電話をするように運転手に頼んで、彼はタオルで傷口を押さえながら、「がんばって！もう救急車が来るから！」と声を掛け続けた。タオルは見る見るうちに血に染まっていったが、熱はまだ失っていないかった。

空が光って、また大きな雷が鳴った。雨はしとどに二人を打ち続けた。

タクシーの運転手の誘導で、何台かの車が反対車線を徐行していったあと、ようやく救急車が到着した。隊員たちに彼女を委ねて、状況を掻い摘んで説明した。何かもっと、別のことをすべきだったのではと、自分の素人処置が悔やまれた。

足を見た隊員は、思わず、アア……と、口を半開きにして声を漏らした。

首が固定されて担架に仰向けになって運ばれていく女の姿を、相良は、屋根の下で隊員と話しながらちらと見た。

「……じゃあ、お知り合いというわけではないんですね。」

「全然、知りません。さっきも言ったように、一緒にいた人間は、彼女を置き去りにして逃げたんです。」

救急隊員は、訝るふう^{いぶか}に首を傾げて、「飲酒運転かな。……その辺は警察に話してください。」と言った。

相良は、ポケットを思い出して、札束を引っ張り出すと、意外と水が染みしていない一番内側に、名刺が挟んであるのに気がついた。

〈株式会社オネスト 代表取締役 三笠竜司^{みかさりゅうじ}〉

聞いたことのあるような名前だったが、考えようすると、間近で見たあの顔が、ヘッドライトを点した大蛇オロチの顔と重なって、胸が悪くなった。

警察が到着する頃には、周囲のマンシヨンの窓にも、様子を覗うかがう住人の影が幾つも目につくようになった。豪雨の中を、部屋着のまま、わざわざ下まで見に来る物好きな野次馬もいた。そのうちの一人が、隙を見て相良に、「事故ですか？」と尋ねた。

相良はただ、ええ、とだけ領くと、その場を離れて先ほど投げ出した傘を取りに行った。

搬送先の病院が決まったことを知らせに来た隊員が、ぼつりと、「有名な人ですね。」と言った。相良は一瞬、自分のことを言われたのかと思って、「え？……いや、」と首を振ったが、相手は構わず、「女優さんですよ、確か。」と言った。

状況が状況だけに、あまりに間の抜けた自分の勘違いに、急に疲労感に襲われた。そして、「女優さん」というその言葉を、ほとんど気に掛けなかった。

警察が到着すると、続けて事情聴取が行われた。道路には、パトカーや白バイが次々と駆けつけて、警告灯の赤い光が、経緯を説明する彼の顔を何度も撫でた。

逃げ出した大蛇オロチの男のことを話しながら、彼は、事故現場に傘を差して足を踏み入れた人が、地面から何かを拾い上げようとしている様をぼんやりと眺めた。それは先ほど、彼がポケットから落とした一万円札のうちの一枚だった。